

菅野美術館

正会員 阿部仁史君
正会員 新谷真人君

3.2 mmという薄い鋼板に、長円形の凸形にエンボス加工を施し、これを背中合わせに溶接することで、厚さ 60 mmのサンドイッチパネルを作っている。主に 8 点の彫刻作品を展示する美術館として、シャボン玉がくっついたような界面で、内部を 8 つの空間に仕切るといふ意匠計画の内容にふさわしく、薄膜のような構造が実現している。

学会の賞には多少なりとも汎用性が不可欠ではないかとの声もきかれ、個人の少数の収蔵品のための美術館という特異性から生まれた特異すぎる建築形態ではないかという議論もあったが、内部空間は多くの業界から評価されており、技術的にも十分将来性が感じられるものであり、その特異性を補って十分に魅力あるものとして評価された。

外観はキューブ形の建築だが、内部の仕切りが、8 つの空間それぞれに固有の気積をイメージし、その気積を持つシャボン玉がくっつくことで作られる界面による多面体を基本形としている。そして、外壁を含め、一部の床スラブを除くほとんどの境界面がこのサンドイッチパネルで作られている。内部の仕切りは、床面を水平にするといった微調整が含まれている。また、8 つの空間は 8 つの彫刻からイメージされる気積を持つ訳ではなく、彫刻の展示位置は建築が完成した後に光の具合などを見て決定されているといったところには、少々純粋さを欠く印象があるものの、この空間の光と音響は芸術家の方々から非常に高く評価されている。建築家自らが展覧会を行った際には、開口からこの空間への光の入り具合や、内部の仕切りによる光の反射具合を熟知していることを生かして、さまざまな色の光によってこの空間を満たしたという。この建築そのものを、一つの彫刻のように見せることができるというのも魅力としてあげられる。また、一見、音響には気を配らずに計画された多面体の室に見えるのだが、音響が面白く多くの音楽家が独特の利用の仕方ですコンサートなどを行っているという。実際に、学芸員の方にその場で少しピアノを演奏していただくと、確かにホールとはやや異なる不思議な音響ながら心地よい印象を受けた。

構造のサンドイッチパネルのほうには、十分すぎるほどの工夫が凝らされている。サンドイッチパネルの製作方法は多くの構造設計者が試行錯誤しているが、そんな中でも軽量で強いこの構造は十分に魅力ある手段の一つに感じられる。3.2 mmという厚みは、主にエンボスの加工性や溶接性から決定されており、強度的にはもっと薄くできるというが、既に軽量鉄骨並みの薄い印象を受ける。エンボスは長円形にして、方向を互い違いに配置することによって、背中合わせにしたときに接触しやすくなるようにしている。接触する位置に孔を空けておき、そこを栓溶接することによって一体化される。鉄骨施工者の技術力にも支えられ、プレスなどの製作においてもさまざまな工夫が考案されたという。現状では製作施工にやや手間のかかる構造ではあるが、八二カムパネルの表面とコアを一体成形したような製作が実現すると大量生産も可能になり、また曲面パネルも製作することができるということで、さらなる可能性が感じられる。

よって、ここに作品選奨を贈るものである。